



若者

学生生活を振り返って

本田博史*

我ながら随分長い間学生生活を送ってきたものだと思う。高校時代をあわせると、十年間である。今春、大学院の修士過程を修了し、いよいよ社会人としての生活を始めるわけだが、今になって思い返してみると、いろいろな事があったような気もするし、大して何もしてこなかったようでもある。「少年易老学難成」とは、このことか。これまでの学生生活を振り返って感じたことを思いつくままに書き並べてみようと思う。

学生時代のことでまず頭に浮かぶのは、残念ながら学問に関することではない。人間には、心理的浄化作用というものがあるそうで、私の場合嫌なことはあまりよく覚えていない。というよりも、単に勉強に対して、不熱心であった所為だろう。そこでまず、スポーツのことから書き始めたいと思う。私は中学生時代から高校大学に至るまで、体育系のクラブに所属してきた。それぞれ種目は違うが、自分ではそのときどきを精一杯やってきたつもりである。そしてこれを通じて、多くのものを学び、また得たように思う。その一つにチームワークがあげられる。スポーツに限らず多くの人間が集まって一つのことをしようとするときに、チームワークが必要なことについては論を待たないが、本当のチームワークはいわゆる協調精神や助け合い精神ではない。安易な協調とは馴れ合いにすぎず、そこからは何も生まれない。時には部員どうし意見が対立し、喧嘩になったこともあるが、私はそれでいいのだと思う。チームメイトに厳しくそしてそれ以上に自己に対して厳しくすること、各々が与えられたポジションをしっかりと守り、さらにその上で全体を見る目を養うこと、チームワークとはそうしたものだと思

う。

私はまたスポーツによって勝つことの難しさ、すばらしさを知った。スポーツの意義は、身心の鍛練にあり、勝つことが目的ではないと言われるかもしれないが、やはりプレーする以上は、勝つことを目標にすべきだと思う。“勝つ”ということは並大抵のことではないからである。特に競り合いになったときは苦しい。一つのミスが試合を決めてしまう。しかしそうした苦しさや緊張感と同時に、何か沸きあがるような気分の昂揚を覚えることがある。ベストを尽くしたい、いいプレーをしたい、そして何よりこの試合にこの相手に堂々と戦って勝ちたいと思う。勝つことに固執することはないが、執着することは必要である。ここまでかと思ったときに、もう一步粘ってみる。何かを掴むのはそういうときである。そしてやってきてよかったと心から思うのだ。

さてもう一つ私はスポーツのおかげで多くの人々から知遇を受け、何人かの得難い友人にめぐり会えたように思う。これは同じ釜の飯を食ったチームメイトはもちろんのこと、互いに競い合ったライバルやクラブの先輩後輩、そしてたとえ種目は違っても共にグラウンドで汗を流してきた者たちをも含めてのことである。それは同じスポーツを志す者同士の共感もあつたろうけれど、やはり何かに打ち込んでいる姿には惹かれるものがあり、また彼等の多くは人間的な魅力も持っていたように思う。これはスポーツに限らず、学問や芸術においてもそうなのだろうが、残念ながら私にはそういう方々と御縁がなかったようだ。彼等とは今でも交際が続いているし、将来もそうでありたいと願っている。そしてこれは私にとって貴重な財産だと思う。

さて、文武両道をめざし、ついに果しえな

* 本田博史 (Hiroshi HONDA), 工学部, 機械工学科, 長谷川研究室, 修士, 機械工学専攻

った私としては、この辺で大学院生活のことについても触れておきたい。私の所属する研究室は機械工作に関する研究を行っており、私のテーマはスピニング加工に関する研究であった。これは研究室でも新しい試みであり、研究にあたってはまず実験装置を作ることから始めなければならなかった。私の場合は通常の旋盤をスピニング加工用に改造したのだが、加工用のローラひとつを作るにしても、主要寸法を文献などを参考にして決めると、後は自分で工夫して作っていくしかない。またせっかく苦労してきたローラも、動力測定がうまくいかず、一から作りなおしといった按配であり、最初は失敗する度につながりしたり、腹を立てたりしたものだ。こうした試行錯誤の繰り返しが研究にはつきものであり、むしろその中で得た知識や経験こそ大切だと思うようになったのは、数々の失敗に慢性になり、腹を立てることすらばかばかしくなってきたからだったように思う。

私は大学院に入っているいろいろな知識を学んだが、それ以上に研究というものについて、おぼろげながらも知ることができたということが大きかったと思う。研究についての方法論や、研究者としての物の見方、考え方を少しは身につけた。そして最も強く感じたことは、研究活動を行うには、常に問題意識を持ってテーマに取り組まなければならないということだ。ただ漫然と実験を行い、データ整理を繰り返しているだけでは研究とはいえない。その中から問題点を見出し、その現象を解析する、或いはさらにその解決方法を捜そうという態度を持ち続けなければ研究は単なる時間の浪費に終わってしまう。尤も私がこのことに気づいたのはごく最近になってからで、やや遅きに逸した感はあるが、今後はこのことを肝に銘じておきたいと思う。

私は学部生の頃から今の研究室にいたので、随分長居をしてきたことになるが、研究室内は自由で家族的な雰囲気があり、本当に楽しい学

生々活が送れたと思う。ここでは、毎日昼休みに研究室全員でソフトボールをすることが伝統になっており、これは夏の炎天下でも冬の雪降でも、雨さえ降らなければ欠かさされたことがない。また年に四回行われる研究室内の報告会の後は、普段実験を行っている工場がコンパ会場に早変わりし、教授を初め、皆で夜遅くまで大騒ぎをしたものである。そうしたことで研究室内のまとまりもよく、今振り返ってみても夏の海水浴や秋の運動会、女子大との合コンなど、楽しい思い出は尽きない。この自由闊達な雰囲気と同様、研究活動においても自主性が重んじられ、最初にテーマと大体の研究方針が決められると、後は各々の裁量に任される。これは一見気楽なようではあるが、ともすれば安易な方向に流れやすく、特に根が怠け者である私などは自らを叱咤しなければならないこともしばしばであった。しかしいろいろな問題にぶつかりながら、曲形にもできる限り自分で考え、処理しようとしてきたことが、遠まわりのように思えても、結果的には、最良の方法であったようだ。

以上いろいろ書き連ねてきたが、今後これらの経験が果してどの程度役に立つかは疑問である。しかし社会人としての生活を始めるにあたって、何事に対しても憶せず、労を惜しまず対処していこうということだけは心に留めておこうと思っている。将来に対して、特別な抱負を持っているわけではないが、ただいい仕事をしたいと思う。自分の持てる能力と情熱の全てを傾け、心から満足のいく仕事ができ、ひいては、少しでも社会に貢献することができたならば、技術者としての私の誇りとするところである。

最後に、長い間あるときは厳しく、あるときはあたたかく私を御指導下さった長谷川嘉雄教授を初め、研究室の皆様へ、深く感謝致します。